

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第475集

HORI UCHI
堀ノ内遺跡 1

—堀ノ内遺跡群第1次調査報告—

1996

福岡市教育委員会

HORI UCHI
堀ノ内遺跡 1

— 堀ノ内遺跡群第1次調査報告 —



遺跡調査番号9365

遺跡略号 HRU-1

1996

福岡市教育委員会

序

福岡市は北方に広がる玄界灘の海を介し、彼地との人、物、文化の交流が先史時代より絶え間なく続けられてきました。この地の利、歴史を踏まえ現在の福岡市は「海と歴史を抱いた文化の都市」、「活力あるアジアの拠点都市」をめざし町づくりを進めているところです。教育委員会においても、こうした町づくりの一環になりうる文化財保護と活用に努めています。やむなく、多様な開発で消滅してしまう埋蔵文化財については、発掘調査による記録保存を講じて後世に残そうと考えています。

今回の発掘調査は今宿平野の奥まった丘陵に位置し、周辺の調査例も少ないところでしたが、中世集落の拠点となる遺跡が発見されました。それは「堀の内」という地名からも裏付けられるものでした。中国からの輸入陶磁器類も多く出土し、その財力を偲ばすものでした。また、製鉄関係の遺物も出土し、既に発見されている周辺の丘陵とともに当地においても、おそらく古墳時代からの生産が行なわれていたものと思われます。

本書はこうした調査成果を取めたもので、研究資料とともに埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後に、調査に際し御協力いただいた建設事業の関係者各位の皆様へ厚くお礼申し上げます。

平成8年3月29日

福岡市教育委員会
教育長 尾花 剛

例 言

- 1 本書は福岡市西区今宿青木竹の内378-2外の発掘調査報告である。
- 2 発掘調査は荒牧が担当し、本書の執筆を行なった。
- 3 本書掲載の遺構、遺物実測、写真撮影は荒牧が主に行なった。
- 4 本書掲載の実測図、遺物等、調査で得られた資料類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管され、公開、活用していく予定である。

凡 例

- 1 本書掲載の遺構図の方位は磁北である。
- 2 掲載図面のアミ掛け、色刷り部分については各個別に説明を加える。
- 3 本書採用の遺構名は溝をSD、掘立柱建物跡をSB、竪穴住居跡をSC、土塀をSK、柱穴をSPとする。番号は通して記した。

遺跡調査番号	9365	遺跡略号	HRU-1
調査地地籍	西区今宿青木竹の内378-2外	分布地図番号	青木113-0639
調査対象面積	940㎡	調査実施面積	940㎡
調査期間	940302~940331	事前審査番号	4-2-407

本文目次

I はじめに

1. 調査の経過..... 1
2. 調査体制..... 1

II 位置と環境

1. 地形..... 3
2. 歴史的環境..... 3

III 調査の記録

1. 調査の概要..... 5
2. 調査の方法..... 5
3. I 区の調査..... 7
 - 010 (S K) 10
 - 002 (S K) 10
 - 045 (S K) 11
 - 036 (S K) 11
 - 109 (S K) 11
 - 110 (S K) 11
 - 300 (S K) 11
 - 098 (S K) 12
 - 024 (S X) 12
 - 142, 143 (S X) 13
 - 121 (S K) 13
 - 146 (S X) 13
 - 019 (S X) 13
 - 123 (S D) 13
 - 144 (S X) 13
4. II 区の調査..... 15
 - 101 (S D) 17
 - 301 (S D) 17
 - 126 (S D) 17
 - 302 (S X) 19

- IV 小結..... 20

挿図目次

図1	周辺遺跡分布図 (1/25,000) ……………	P 2	図15	110 (S K) 出土遺物実測図 (1/3) ……	P 12
図2	調査地点位置図 (1/4,000) ……………	P 4	図16	300, 98 (S K) 実測図 (1/40) ……	P 12
図3	調査区現況測量図 (1/500) ……………	P 6	図17	024 (S X) 出土遺物実測図 (1/3) ……	P 13
図4	I区遺構配置図 (1/200) ……………	P 7	図18	142, 143 (S X) 出土遺物実測図 (1/3) P 13	
図5	I区上層断面図 (1/60) ……………	P 8	図19	121, 146 (S K) 出土遺物実測図 (1/3) P 13	
図6	集石実測図 (1/60) ……………	P 9	図20	I区包含層出土遺物実測図 (1/3) ……	P 14
図7	010 (S K) 実測図 (1/40) ……………	P 9	図21	I区包含層出土鉄器実測図 (1/3) ……	P 14
図8	010 (S K) 出土遺物実測図 (1/3) ……	P 9	図22	調査区南西壁土層断面 (1/80) ……	P 16
図9	002 (S K) 実測図 (1/40) ……………	P 10	図23	101 (S D) 土層断面 (1/60) ……	P 16
図10	019 (S K) 実測図 (1/3) ……………	P 10	図24	II区遺構配置図 (1/200) ……	折り込み
図11	045 (S K) 実測図 (1/40) ……………	P 11	図25	101 (S D) 出土遺物実測図 (1/3) ……	P 17
図12	045 (S K) 出土遺物実測図 (1/3) ……	P 11	図26	126 (S D) 出土遺物実測図 (1/3) ……	P 18
図13	036 (S K) 実測図 (1/40) ……………	P 11	図27	302 (S X) 出土遺物実測図 (1/3) ……	P 19
図14	109, 110 (S K) 実測図 (1/40) ……	P 12	図28	表土、検出時出土遺物実測図 (1/3) ……	P 19

写真目次

写真1	I区全景 (南から)
写真2	I区土層断面B—F
写真3	I区上層断面C—D
写真4	集石露呈 (西から)
写真5	010 (S K) 完掘状況 (東から)
写真6	010 (S K) 内集石 (北から)
写真7	002 (S K) 完掘上層断面 (東から)
写真8	109 (S K) 完掘上層断面 (北西から)
写真9	110 (S K) 完掘土層断面 (南から)
写真10	II区全景 (南東から)
写真11	II区全景 (北西から)
写真12	101 (S D) 上層断面 (調査区北壁)
写真13	101 (S D) 土層断面 (中央部)
写真14	出土遺物 1
写真15	出土遺物 2

I はじめに

1 調査の経過

平成5年3月8日、大木 實氏より特別養護老人ホーム建設事業に伴い、建設地における遺跡の有無について教育委員埋蔵文化財課へ事前審査願が提出された。これを受け当課では遺跡群の範囲外であるが、隣接地であるため踏査を行い、丘陵斜面に古墳と思われる集石を確認するとともに建設地においては試掘調査が必要と判断した。しかし、現況は雑木が生い茂るため伐採を依頼した。

試掘調査は同年4月21日に実施した。トレンチを主に丘陵部に入れ、中世の遺構を確認したが、改葬された墓地の範囲では随所に墓塚が見られ、遺構は検出できなかった。丘陵裾部は建造物があり、この時点では一部のみ試掘を行なったが2m以上の埋土で遺構は検出できなかった。その後、発掘調査に向けて建設事業関係者や本市民生局も含め調査範囲、時期、費用等について協議を重ねた。

発掘調査は平成6年3月2日より、本報告ではⅠ区とする丘陵部から始めた。後半からは丘陵裾のⅡ区の試掘を行い、遺構を確認するとともに、重機による表土剥ぎを急遽行なった。特に後半は予想より調査区の範囲が広がり、慌ただしい調査となった。

2 調査体制

調査は以下の体制で臨んだ。

調査主体：福岡市教育委員会

調査総括：埋蔵文化財課長 折尾 學

埋蔵文化財第1係長 横山 邦継

事前審査：文化財主事 山口 謙治

係員 菅波 正人

庶務：埋蔵文化財第1係 吉田麻由美

調査担当：埋蔵文化財第1係 荒牧 宏行

調査作業員：百武 美隆 峯 不二夫 桐山 信保

櫛木 修一 黒木 正治 櫛崎 耕助

友池 富美恵 堀田 昭 柴田 常人

柴田 タツ子 堀 ウメ子 松井 フ

ユ子 松本 藤子 坂田 美佐子

松隈 順子

整理作業：品川 伊津子 永井 和子 永田 世津子

坂井 美穂 木下 三奈



— 調査風景 —

調査に際し地権者、特別養護老人ホーム、ギオン設計、その他関係者各位の方々に色々ご協力頂いた。記して感謝申し上げます。



- 1 今宿遺跡群 2 女原遺跡 3 女原笠掛遺跡 4 大塚遺跡 5 今宿五郎江遺跡 6 新聞古墳群F群 7 谷遺跡 8 谷上古墳群C群 9 青木遺跡群 10 女原古墳群 11 新聞古墳群 12 新聞製鉄遺跡 13 青木城跡 14 谷上古墳群 15 焼山古墳群B群 16 相原古墳群 17 相原製鉄A遺跡 18 相原製鉄B遺跡 19 相原製鉄C遺跡 20 本村遺跡 21 本村古墳群A群 22 焼山製鉄遺跡 23 油坂古墳群B群 24 シュウガ谷製鉄跡 25 油坂古墳群A群 26 鶴崎遺跡 27 鶴崎古墳群 28 鶴崎製鉄A遺跡 29 鶴崎製鉄B遺跡 30 壺の内遺跡 31 壺の内の内製鉄遺跡 32 焼山古墳群B群 33 長垂山古墳群 34 長垂大谷遺跡 35 草場古墳群 36 生の松原遺跡 37 斜ヶ浦瓦窯跡 38 斜ヶ浦製鉄遺跡 39 草刈古墳群 40 高崎古墳群 41 大又遺跡 42 宮の前遺跡 43 広石遺跡群 44 広石古墳群 45 笠間谷古墳群 46 野方中原B遺跡 47 野方古墳群 48 野方家原西遺跡 49 羽根戸古墳 50 高祖地路怡土遺跡 51 元塚防塁

図1 周辺遺跡分布図(1/25,000)

Ⅱ 位置と環境

1 地形

福岡市の西部、早良平野と糸島平野の境を限るように派生した丘陵が分岐し狭長な今宿平野が広がる。東は叶岳(341m)、西は高祖山(416m)から派生した丘陵で限られ、その谷部を七寺川が蛇行しながら北流し、この小平野を形成する。さらに北側では今津湾を臨み砂丘地帯が形成されている。

本調査地点は今宿平野の奥まった東縁丘陵部に位置する。調査区では七寺川が大きく東に迂回し、丘陵部に攻撃斜面を形成している。福岡市土地分類(細部)調査では人工改変地になっている。これは現在よりさらに東へ迂回していた七寺川の川筋を変える改埋め立てと丘陵部を段築状に開削したことを示すと思われた。

2 歴史的環境

周辺の調査例は少ないが、丘陵部まで含むと古墳群の調査が目立つ。後期群集墳320基以上と12基の前方後円墳が存在する。調査区付近では鍋崎古墳群、広石古墳群、高崎古墳群、相原古墳群、徳永古墳群等に調査例がある。丘陵部ではこれら古墳群とともに製鉄遺跡の存在が目される。良好な砂鉄が産出される丘陵部では鉄滓の散布により、新開、焼山、相原、鍋崎、堀の内製鉄遺跡群等が知られている。調査例は少ないが堀の内遺跡で平安時代、大塚遺跡で12世紀前半の製鉄遺構が検出されている。しかし、上述の古墳への鉄滓供献例が数多く知られ、古墳時代から製鉄関連の操業が為されていた可能性がある。

沖積地の青木遺跡群では弥生時代中期、中世集落が調査されている。弥生中期の集落は鍋崎遺跡群の一部沖積地でも検出され、両遺跡調査ともに今山産の石斧、未製品を出土した。

さらに北側の砂丘地帯今宿遺跡群では甕棺墓群が調査され、土壌からは細形銅剣、勾玉が出土している。

最後に今回の調査の主体を占めた中世後半期の背景を若干記しておく。博多を中心に勢力を確保した大内氏は南側丘陵の高祖城を拠点に、志摩郡に分郡をもつ大友氏は海岸部の今津に柑子岳城を構えて対立していた。大内氏滅亡後は原田氏が高祖城に構え、大友氏方の志摩郡代で柑子岳城監督の臼杵氏と戦いをくりかえして、豊臣秀吉の介入により鎮圧された。なお、本遺跡の近く青木村は志摩郡に属している。

本遺跡名称の堀ノ内の字名は調査地点より南方に位置し、周辺には中屋敷、蔵ノ元等の地名が残る村落支配拠点を連想させる。



— 調査Ⅱ区を北から望む —



図2 調査地点位置図 (1/4000)

- | | | | |
|------|--------|------|---------|
| 0628 | 青木遺跡群 | 0639 | 堀ノ内遺跡 |
| 0662 | 焼山古墳B群 | 0669 | 堀ノ内製鉄遺跡 |

Ⅲ 調査の記録

1 調査の概要

調査区は本報告ではⅠ区と呼称するテラス状に改変された標高30mの丘陵斜面と、Ⅱ区とする七寺川が蛇行し、攻撃面となる丘陵裾部を含む。Ⅰ区からは中世から近世にかけて2面から柱穴群、近世の土城墓2基が検出された。鉄滓や壱体も出土し、鍛冶が行なわれていたと考えられる。

Ⅱ区からは丘陵斜面から古墳時代後期の遺物が出土するが、遺構は流失し、皆無に近い。丘陵裾の地形変換線上には中世水路、下層からは古墳時代後期の遺物を含む流路が検出され、沖積地には柱穴が散在する。この地点からも鉄滓が出土し、周辺で製鉄関連の作業を行なわれていたことが推される。また、古代瓦の出土は近く相応の施設があるものと思われる。

このように本調査においては「堀の内」の地名からも中世の開発拠点を想起させるような集落が検出された。さらに、鉄滓の出土は周辺の丘陵からも確認されている製鉄関連の作業が時期は不明確であるが、古墳時代後期の可能性も含め、当地でも行なわれている。

2 調査の方法

調査はⅠ区からはじめその後半からⅡ区を並行し行なった。表土剥ぎを重機で行なった後は人力で堀下げ、遺構が検出されない敷地範囲で廃土処理をした。調査区はⅠ区、Ⅱ区各々、任意の方向に主軸を決め、その位置は建設計画に伴う現況測量のトラバースに調査区の主軸を組み込んだ。



写真1 Ⅰ区全景(南から)

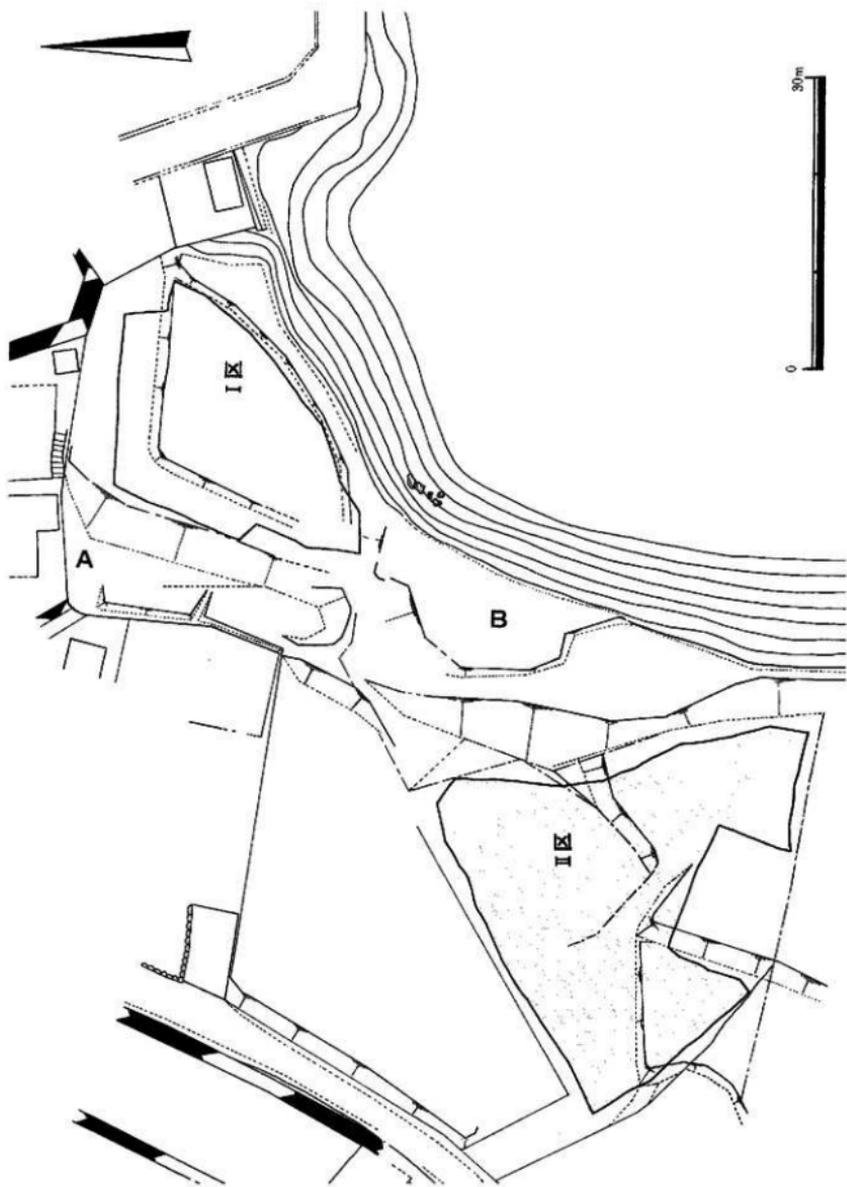


图3 调查区现状测量图 (1/500)

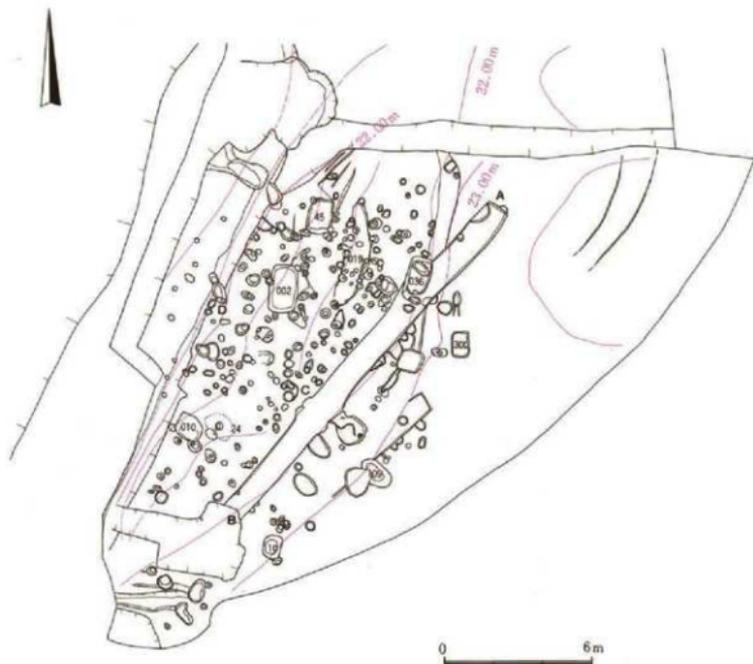


図4 I区遺構配置図 (1/200)

3 I区の調査

層序

(図6) 東側へ派生する丘陵斜面をテラス状に造成した三角形の敷地部分をI区とした。標高は22~23mを測り、北西へ下降していく。東側の丘陵崖面近くの地山は丘陵下部の風化岩で、新しい開削による削平のためか遺構はほとんど見られない。西側は上層に明灰褐色土(A-Bの6層、C-Dの1層)、下層に黒褐色砂質土(A-Bの7層)包含層が堆積し、地山は明黄褐色砂礫になる。下層の黒褐色砂質土は丘陵斜面で旧地形が比較的この西側中央部に厚く北側では薄くなる。試掘トレンチ以東では堆積しない。南側の地山の一部は還元した灰色砂礫(A-Bの11層)ないし、鉄分の沈着した褐色砂礫が広がる。西側外回りの一段低い範囲では遺構の大半が消滅し、更に西側の平坦面(A地点)の試掘では青灰砂礫から粘土層が厚く堆積し、遺構は見いだせない。南側の一段高い平坦面(B地点)は改葬された墓地で、試掘によると現代までの墓塚が多く、調査区から除外した。

遺構

上述のようにI区西側では包含層が大きく2層堆積するため下層の黒褐色の上面と地山上面の2面で遺構検出を行なった。しかし、上面で検出された遺構は少ないが、近世の土壌墓ないし木棺墓と思われる002、010(桶棺の可能性)がある)が検出できた。下面からは中世末以降の柱穴が数多く検出された。また炉壁や鉄滓も出土し、鍛冶が行なわれていたものと思われる。

明確な遺構は見いだせないが、表土、包含層等から6世紀後半から7世紀代にいたる遺物が出土した。なお、II区からはこの時期の土師器甕や甕が出土し、生活遺構に伴うものと考えられる。

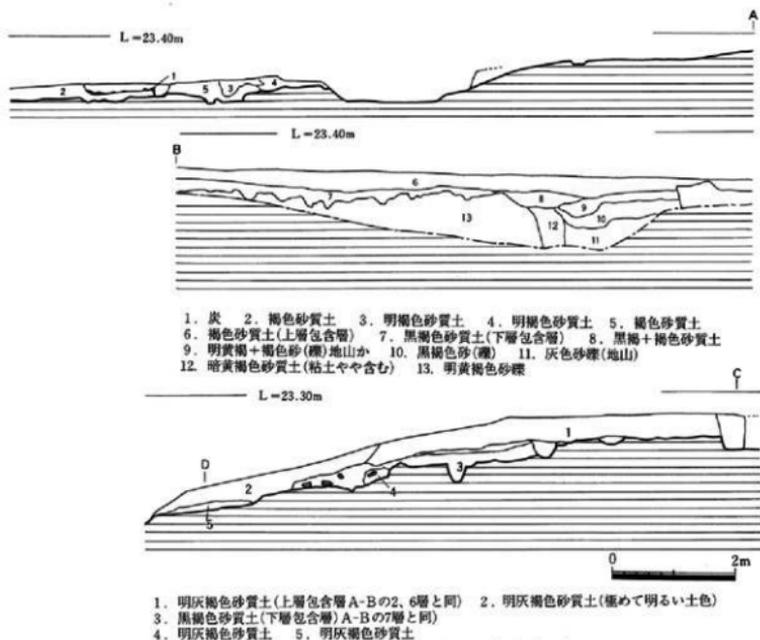


図5 I区土層断面図(1/60)



写真2 I区土層断面(E-F)



写真3 I区土層断面(C-D)

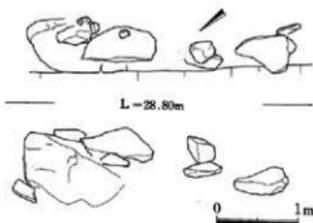


図6 集石実測図(1/40)

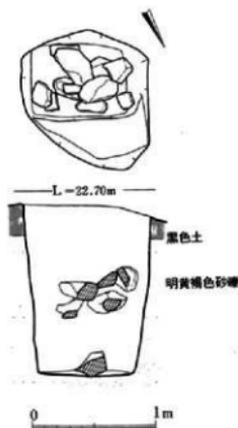


図7 010(SK)実測図(1/40)

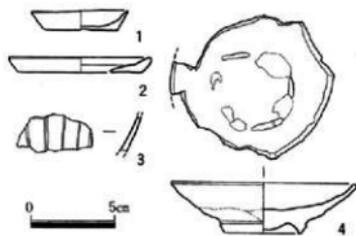


図8 010(SK)出土遺物実測図(1/3)



写真4 集石露呈(西から)



写真5 010(SK)完掘状況(東から)



写真6 010(SK)内集石(北から)

集石遺構

丘陵斜面上に集石する箇所があり、古墳石室の残骸の可能性を考え、石の露呈作業を行なった。しかし、集石の下面のレベルは一定せず、掘り方も検出されなかった。斜面上に更にもう1箇所トレンチを設定し、周構とも考えられる弧状の落ちを検出したが短く途切れ、集石との関係は明らかでない。周辺踏査を行なったが、古墳は確認できない。

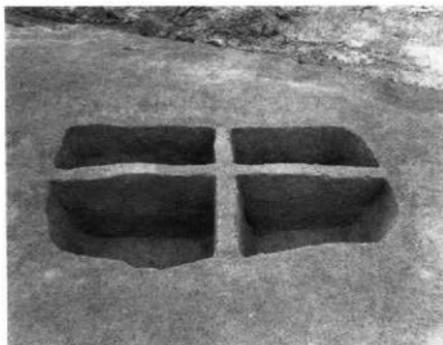


写真7 002(SK)完掘土層断面(東から)

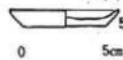


図10 019(SK)実測図(1/3)

010 (SK)

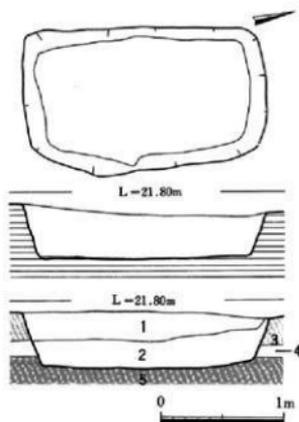
調査区の南西部で検出された。埋土は灰褐色土で下層包含層の黒褐色砂質土を掘込む上面の遺構である。上面は長軸111cm、短軸62cmの長方形プランであるが、北側が大きく崩れている。下底は長軸78cm、短軸60cmで正方形に近くなる。深さは140cmが遺存する。中位の深さに崩れ落ちた状態の集石が検出され、さらに底面中央に1個の石が出土した。石は最大で長径40cmの大きさである。土層では確認できなかったが、木蓋上にあったものが腐食とともに落下したものと考えられる。当地の墓地としての土地利用からも墓の可能性が高い。形状、深さから桶棺も推定される。

図示外に鉄器刀子(?)小片が出土。1の土師皿は完形で径5.8cm、器高1.2cmを測る。器面が剥落しているが、口縁端部にわずかにスス状炭化物が付着している。2の土師皿は復元口径8.5cmを測る。摩耗が著しく調整不明。3の青磁碗は直線的に菊弁状のものが形られている。釉は淡いオリーブ色を呈し、氷裂がみられる。4の陶器は下底より出土した。口径11.4cm、器高3cmを測る。内外面の全面に施釉されているが畳付は割れ、砂目が付着する。外面はオリーブ色がかった灰色の釉の上かハケで灰白色の釉を直線的に横方向へ3箇所から施す。灰白色の釉は高台内にもみられる。内面は灰白色の施釉がなされるが、見込みに厚く輪状に施されている。内面見込みに重ね焼きの跡と砂目跡がみられる。

002 (SK)

調査区の中央西寄りで検出された。長方形プランを呈し、長軸197cm、短軸長117cmを測る。主軸方位は近接する036、045とほぼ同じく、真北に近い。深さ47cmが遺存し、上層包含層の灰褐色砂質土(図5、A-Bの2、6層)の上位から掘込まれ、地山の明黄褐色砂礫をわずかに下がった位が下底のレベルである。埋土は明灰褐色砂質土で包含層からもプランは明確に検出できた。

出土遺物はわずかで、図示した5の土師皿以外に白磁壺小片と須恵器片がある。5は口径6.7cm、器高1.0cmの土師皿である。黒褐色を呈し、磨耗し調整不明。



- ① 暗灰褐色土砂質土(地山の青褐色砂礫を若干含む)
- ② 暗灰褐色砂質土(中砂粒含有)
- ③ 灰褐色砂質土
- ④ 黒褐色より灰褐色砂質土
- ⑤ 明黄褐色砂礫

図9 002(SK)実測図(1/40)

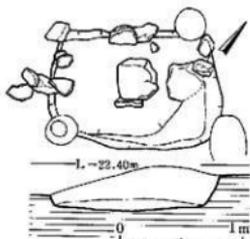


図11 045(SK)実測図(1/40)

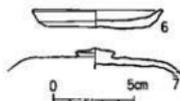


図12 045(SK)出土遺物実測図(1/3)

出土遺物は図示したものの他、土師器環等が若干出土したにとどまる。6は口径8cmを測り、外底部に糸きりの痕跡を残し、板目がつく。7の須恵器環蓋には低平な宝珠つまみがつき、犬井部は水平に移行していく。

036(SK)

調査区北側の中央で検出された。下層包含層がほとんど堆積しない地山面のレベルが24mの高位置に占める。プランは短軸長90cm、長軸長約180cmを確認したが、埋土は明黄褐色砂礫で地山との区別が難しく、掘りすぎている可能性がある。

出土遺物は中世の土師器環、須恵器が若干出土した程度である。

109(SK)

調査区の南側の崖面より検出された。長軸長140cmの楕円形プランを呈す。南側は別の遺構で切られている。深さ30cmを測り、壁の立ち上がりは緩やかである。底面は平坦であるが、地形に沿って、西側へ低くなる。焼土は検出されないが埋土中に炭が多く見られる。木炭窯の可能性はある。

出土遺物はない。

110(SK)

調査区南端の崖面近くで検出された。長軸長105cm、短軸長65cmの長方形プランを呈すが下底は正方形に近い。主軸方向は真北に近く他の多くの土壌と近似する。深さ24cmが遺存し、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は地山の明黄褐色砂礫を若干含む明灰褐色砂質土である。

出土遺物は白磁の8以外に中世の土師器が若干あるのみ。8はいわゆる口ハゲの白磁皿である。復元口径8.8cm、底径5.2cm、器高2.5cmを測る。見込みで圏線を巡らす。口縁端部から内面の一部と外底部から体部の一部にかかった範囲の釉を剥ぎ取る。釉色はオリーブ色に近い灰色で、露胎の外底部は明茶色を呈す。

300(SK)

調査区の北東部崖面より検出された。これより以東では削平の為か遺構は検出されない。長軸長100cm、短軸長70cmの長方形プランを為し、主軸方位は多くの土壌同様、真北に近い。深さ15cmが遺存し、底面が若干、北側へ下がる。出土遺物はない。

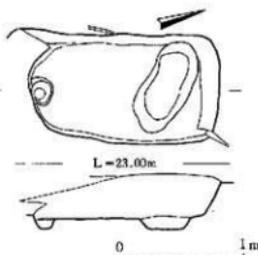


図13 036(SK)実測図(1/40)

45(SK)

調査区の北西部で地山面(下面)から検出された。短軸4.8m、長軸6.8mの長方形プランを呈す。主軸方向が近接する002、036と同じである。壁高26cmを測り、床面はほぼ平坦である。

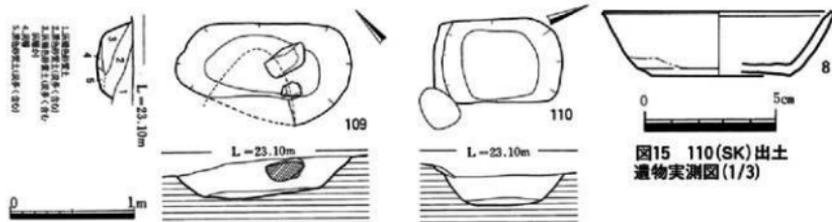


図14 109、110(SK)実測図(1/40)

図15 110(SK)出土遺物実測図(1/3)



写真8 109(SK)完掘土層断面(北西から)

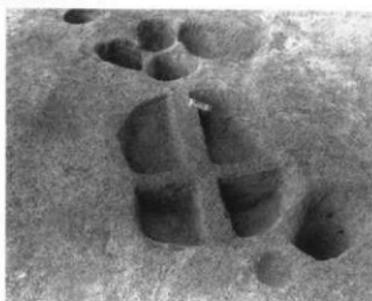


写真9 110(SK)完掘土層断面(南から)

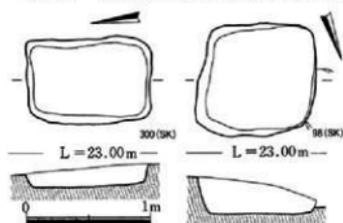


図16 300、98(SK)実測図(1/40)

098(SK)

調査区北東部で検出された。一辺92cmの正方形に近い。深さ30cmを測る。出土遺物はない。

その他の遺構

ここでは遺構の遺存が悪く正確なプランが検出されないものを記す。個別には図示せず、遺構配置図(図4)にその形状、位置を示す。

024(SX)

調査区南西部で検出された鍛冶炉があったと思われる遺構である。下層包含層(黒褐色砂質土)中に長軸90

×130cmの円内に炉壁、焼土が集中する。炉壁は層厚5cmの範囲に崩壊して散在し、下部構造も不明確であった。中央部に検出された径30cmのPitや炉壁に混じった石が下部構造や作業台等の施設に伴う可能性もある。鉄滓は炉壁が集中する範囲からは小さいものが3個のみ出土したが、周辺下層包含層が堆積するトレンチ以西では散在的にこの包含層中から出土したがその量は少なくコンテナ1箱にも満たない。その大きさも径5cm以内の小さなものである。

鉄滓以外に周辺も含め遺物9～16が出土し、11、12はやや南に離れた位置で出土した。9は口径8.6cm、器高1.0cmを測る土師皿である。外底部は糸切り。10は復元した底径が9.0cmを測る坏である。外底部に糸切りの痕跡を残す。11は口ハゲの白磁皿である。口径11.2cm、器高3.0cmを測る。外底部の軸は拭き取られるが、釉が付着する部分が多い。12は編蓮弁の青磁碗である。複弁で、彫刻の切り合いが良く判る。13は瓦質の足銅片である。接合部の押さえが丁寧に施されている。14は砥石である。

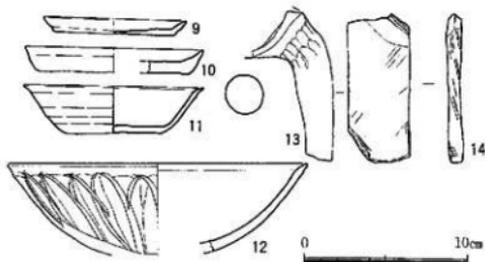


図17 024(SX)出土遺物実測図(1/3)

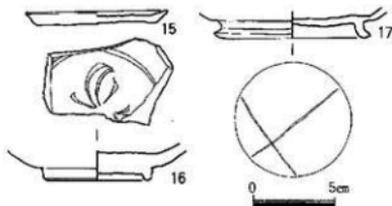


図18 142,143(SX)出土遺物実測図(1/3)

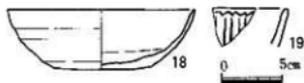


図19 121,146(SK)出土遺物実測図(1/3)

幅3.8cmの長方形をなし、細い線刻の使用痕がみられる。淡桃色を呈した堆積岩製で仕上げ用と思われる。

142、143(SX)

一段落ちた北西際で検出。プラン、掘り方ともに不整形をなし、開析を受けた窪みの可能性が高い。地山、埋土ともに粘性が強く湧水する。出土遺物は上段から流入してきたものと考えられる。15は143

から出土した土師皿で、口径8.8cm、器高0.8cmを測る。外底は糸切り。16は142から出土した龍泉窯系青磁で、見込みに蓮花を彫る。17は142から出土した須恵器坏身である。高台端部は外へ張りだし、外底部にヘラ記号を有す。

121(SK)

調査区南端で検出された。長軸長90cm、短軸長50cmの短辺が弧状の方形プランを呈す。深さ10cmで遺存が悪く、プランも崩れている可能性がある。上軸は北西方向で、他の土壌とほぼ同じである。18は口径11.5cm、器高3.7cmを測る土師器坏である。

底部はやや丸みをもつ。磨耗が著しく調整不明。内底部が黒色を呈す。

146(SX)

南端の包含層である。出土遺物19は菊弁を刻む青磁碗である。

019(SX)

調査区北側の中央で地山面から検出された。深さ6cmで、残りが悪く正確なプランはつかめていないが竅穴住居跡の可能性もある。出土遺物には土師皿を含む土師器片、古墳時代後期の須恵器坏、小鉄滓が5個等あるが、プランが不明確なため伴わないものも含んでいると思われる。

123(SD)

調査区南端で検出された。丘陵崖面の延長方向へ延びた溝状遺構である。北側に隣接して同様の流路があり、南側の一段高いテラスとの間の地形変換点にできた自然流路の可能性もある。出土遺物は土師皿、口ハゲの白磁皿等が若干ある。

144(SX)

調査区の北西際で検出された。調査区の北西部では高位置のため下層包含層の黒褐色砂質土がほとんど見られず、暗灰色砂質土のみが堆積する。この包含層に明灰色砂質土が階段状に埋まる。下底で低レベルになり下層包含層がみられるようになる。出土遺物は土師皿を含む土師器片と小鉄滓が7個出土したが、埋土からきわめて新しいものと考えられる。

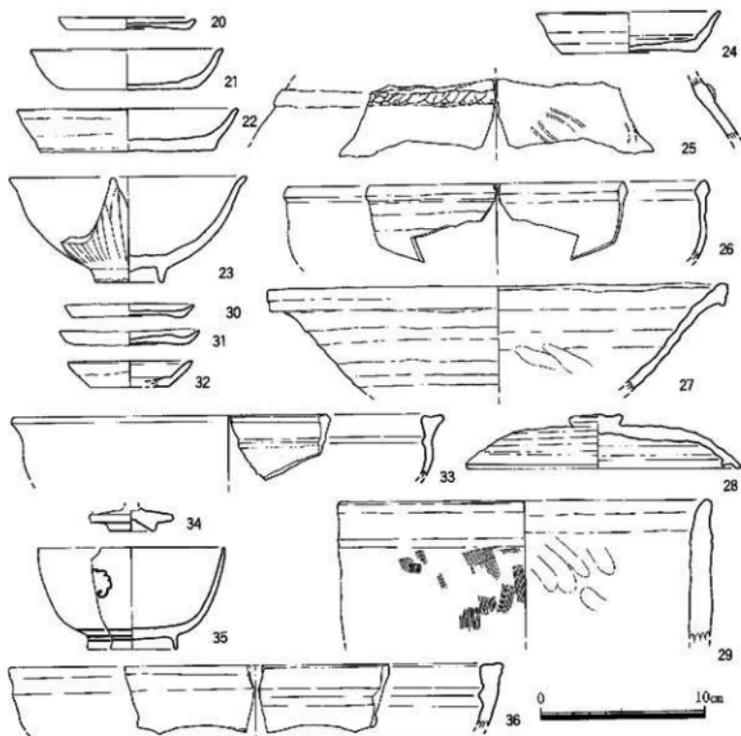


図20 I区包含層出土遺物実測図(1/3)

包含層出土遺物

20~23、26~29は下層包含層、24、25は上層包含層、30、31は撿乱、32、33は調査区南側の検出面、34~36は調査区南端で斜面上位からの流出土中から出土。20~22は土師器の皿と坏で、21の外底部に糸きりの痕跡を残す他は調整不明。23は龍泉窯系の青磁碗である。口縁部端が外反し、軸は厚く、蓮弁が不明瞭となっている。濃いオリブ色を発し、畳付のみ露胎で赤褐色を呈す。

内面は無文。24は口径11.2cmを測る土師器坏、25は黄褐釉陶器で遺存する内外面に施釉されている。外面に指捻りを入れた突帯を貼りつける。内面に弧状のアテ具の痕が残る。26は風化が著しいが黄褐色を発した釉が施された陶器鉢である。遺存する内面全体に施釉されているが、外面は口縁下に垂下し、露胎の部分のみみられる。27は東播系捏鉢である。外面口縁下に重ね焼きの痕をのこし、内外面の口縁部近くが一部赤変している。28は須恵器坏蓋、29は土師器覆片である。30は口径8.0cm、31は8.6cmを測る土師皿である。32は口ハゲの白磁皿で、外底部の釉は拭き取る。33は黄褐釉が施された捏鉢で



図21 I区包含層出土鉄器実測図(1/3)

ある。遺存する外面と内面口縁部に施釉される。内面の露胎部分は褐色を呈す。34は茶壺蓋で、外面に黒褐釉が施される。35は染め付け椀、36の陶器捏鉢は外面の一部に露胎部分がある他は施釉されている。

包含層出土鉄器

37～41は調査区西側の斜面包含層から出土し、38、40、41は下層黒褐色土中である。37は断面方形を呈し、釘、若しくは茎と思われる。38は鉄鍔基部の2個体が錆着している。39は刀子状で背部は遺存するが刃部を欠く。40は膨れているが、器厚2mmの薄さである。両側面は平行に直線的である。41は図示した観察できる断面刃部の形状がみられる。背部は若干弧を描く。

その他、62個の鉄滓が出土しているが、6cm以下の小さなもので製錬滓、鍛冶滓両者含む。

4. II区の調査

II区は図3で示すようにI区の南西に位置した丘陵裾部である。調査区は丘陵斜面と以西の沖積地を含む。II区の北西部の敷地は試掘した結果、厚さ2m以上の現代客土の下から青灰色の粘土～砂層が確認された。従って、II区の北西際から北東の丘陵崖裾のラインに沿って、七寺川が攻撃、開析していた地形を、河川改修によって整地されたものと判断された。

II区南西部では図21に示すように西側へ緩やかに下降する流土が観察され、地山は黄褐色～灰褐色の砂質土である。遺構は検出されない。西端で段落ちが見られ、中央部の標高20.75m付近にまわる。上部には石が多くみられたが埋土から新しい客土と思われる。

中央部の丘陵斜面では柱穴等が散在するが、残りが悪く、その大半は流失したものと考えられる。遺構の時期は126(SX)のように古墳時代後期のものを含む。検出面の明黄褐色土のさらに下層に黒色砂質土が堆積するが、層中は無遺物であり、下面の湿りがある明黄褐色粘質土には遺構はない。



写真10 II区全景（南東から）

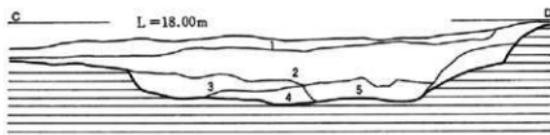


写真11 II区全景（北西から）

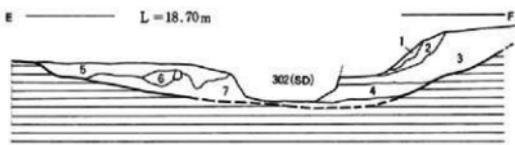


1. 表土(腐植土)
2. 明褐色砂質土(黄褐色ブロック含む) 2-1. 褐色砂質土 2-2. 褐色砂質土
3. 明灰褐色砂質土(砂土に近いしまりなし)
4. 褐色砂質土
5. 暗褐色砂質土(黄褐色ブロックを若干含む)
6. 黒褐色砂質土
7. 明淡黄褐色砂質土
8. 明淡黄褐色砂質土(粗砂質白色粒(岩粒)を含む)
9. 淡灰+褐色砂質土(埋土か)
10. 淡青灰砂質+粘土
11. 淡青灰粘質土
12. 暗灰色砂質土
13. 淡青灰砂質+粘土
14. 黄褐色砂質土+灰色砂質土

図22 調査区南西壁土層断面(1/80)



1. 褐色粘質土
2. 暗褐色砂質土(粘性強い)
3. 茶褐色粘質土(砂粒多く含む)
4. 黒褐色粘質土
5. 黒褐色粘質土(砂粒含む)
6. 茶褐色粘質土(地山)



1. 灰褐色砂
2. 青灰粘土+砂
3. 赤褐+灰褐色砂質土
4. 淡灰色砂(古墳時代後期の遺物含む。大きな破片含む。)
5. 明黄褐色+黒褐(マンガン)砂質土
6. 灰色+褐色砂質土
7. 灰色砂(古墳時代後期の遺物含む。)

図23 101(SD)土層断面(1/60)



写真12 101(SD)土層断面(調査区北壁)

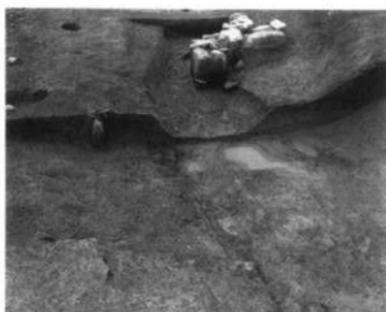


写真13 101(SD)土層断面(中央部)



図24 I区遺構配置図(1/200)

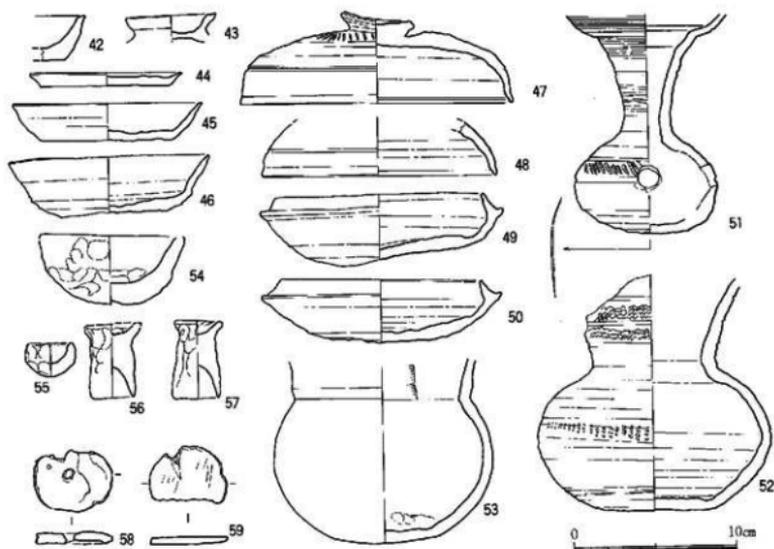


図25 101 (SD)出土遺物実測図(1/3)

丘陵裾(崖裾)では自然流路の101(SD)をさらに北西の沖積地で柱穴がわずかに散在するのを検出した。しかし、遺構は限られ以西では検出されない。

101(SD)、301(SD)

調査区の中央部、丘陵裾部を巡るように走行する。上部に断面台形の中世水路(301)と考えられる流路を確認し、下層に丘陵裾を挟むような自然流路(101)が検出された。301は幅1.3~1.5m、深さ20~40cmを測り流路を2度以上変えている。

101(SD)は中央部で大きくふくらみ最大幅8mを測り丘陵を挟む。最下層に灰色砂や暗褐色の有機物を多く含む粘土が堆積し、緩やかに立ち上がる。上層は砂土を主体に人頭大以上の転石を含む。

出土遺物は101(SD)下層砂層中から須恵器が多く出土し、総じてコンテナ6箱分に及ぶ。44は301(SD)から出土し、他は101(SD)に随し、48~50、52は最下層の砂層中から出土。42は須恵器坏身、43は須恵器蓋、44の上師皿は復元口径9.2cmを測る。45、46は須恵器坏身、47の須恵器蓋は外面天井部に橢圓列点文を、内面には弧状のアテ具の痕を残す。48~50は須恵器坏である。51は須恵器踵、52の須恵器壺は頸部に橢圓による波状文、胴部に橢圓列点文を施す。灰白色を呈し焼成不良。53は土師器丸底甕である。54~57は手捏ね、ミニチュア土器である。56、57は甕台形をなすが逆の可能性もある。58、59は滑石製の紡錘車である。58は中央と側縁に寄った2箇所に穿孔する。59は側縁に寄った1箇所のみ径2mm弱の穿孔がみられる。

126(SD)

丘陵斜面で表土剥ぎ時に土器が集中する部分として確認した。掘方は不明瞭で下底がわずかに残る程度であった。

60~64は手捏ね、ミニチュア土器である。60、61は凸レンズ状の円盤の中央を押し縮み、60にはハ

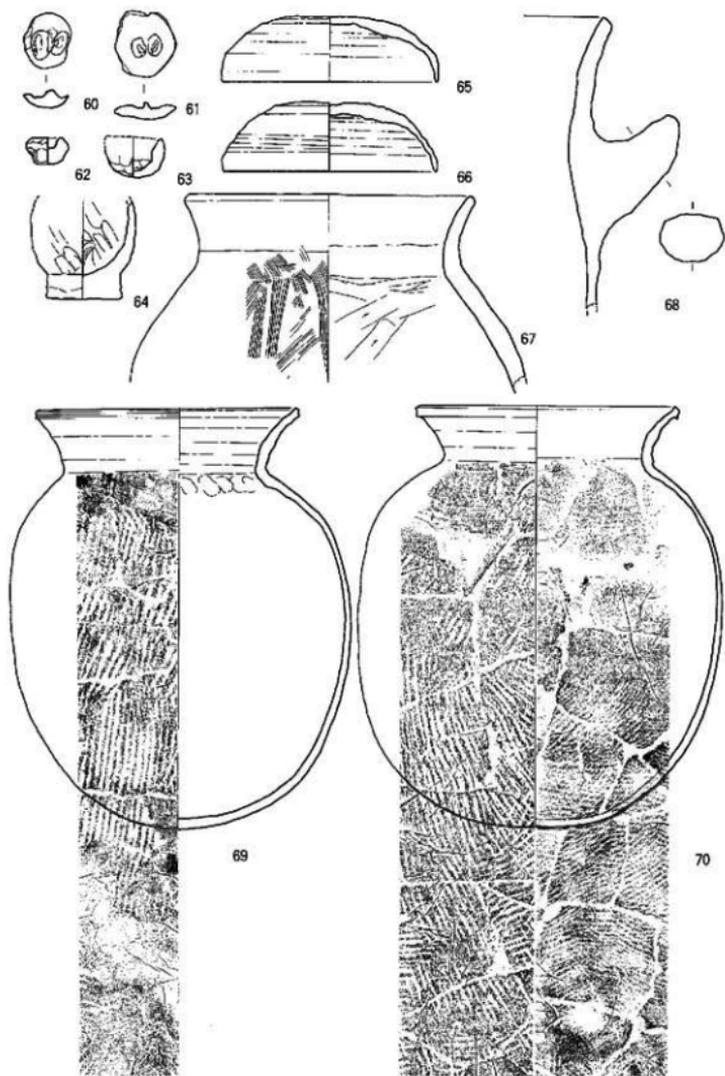


图26 126(SD)出土遗物实测图(1/3)

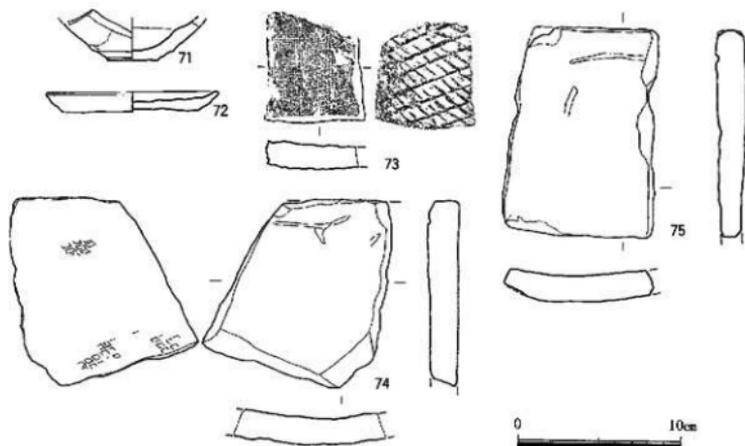


図27 302(SX)出土遺物実測図(1/3)

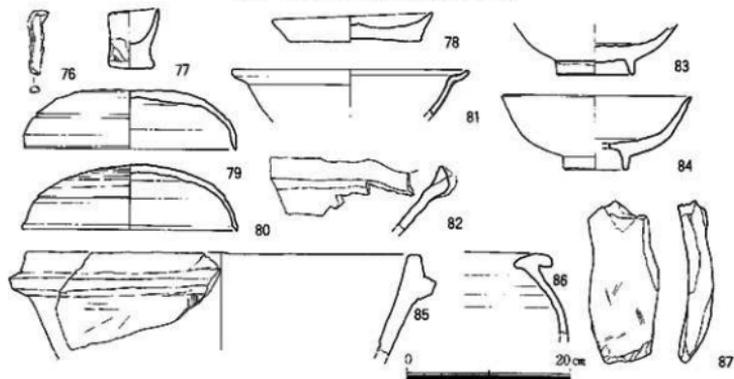


図28 表土、検出時出土遺物実測図(1/3)

ケ目がつく。65、66は須恵器坏蓋、67は土師器甕、68は甗である。69、70は須恵器を模した土師質の甕で外面に平行タキを施す青灰色を呈し硬質、69の内面はナデを施し、70の内面は細く直線に近い刻みのアテ具痕が底部まで残る。

302(SX)

101(SD)の北端で溜り状の浅くプランが不明瞭な窪みを検出した。71は天目、72は土師皿、73は凸面に斜格子タキを施す青灰色を呈し硬質。74、75は凹面に布目がつく紐状の痕跡が認められる。両者灰白色を呈し軟質。

表土、検出時出土遺物

76は中央部から出土した鉄製釘である。77のミニチュアは101(SD)出土と同形である。78は丘陵部

から出土。底部が厚い土師皿である。口径9.7cm。80の須恵器坏蓋の外面部の段は沈線化している。81は青磁、82の東播系須恵器は101(SD)近くから出土。83は外面体部は褐釉、内面と外底部は白磁である。内面見込みを輪状に掻き取り、高台と畳付きは露胎である。84は薄い橙色を発色した磁器である。内面見込と畳付きを掻き取る。85は石鏡、86は灰色に近いオリーブ色を発した磁器である。口縁部上面に重ね焼きの痕がみられる。87は堆積岩製の磁石である。

IV 小 結

遺構の時期と性格

調査で検出された主な遺構はⅠ区で中世後半期14～16世紀代の柱穴を主体とした集落、その上面近世の土壌層が確実と思われるもので2基、他に6基以上の土壌が検出された。Ⅱ区では古墳時代後期の土壌1基、古墳時代後期近くの埋没と考えられる自然流路1条、中世水路1条、中世までの柱穴がある。

Ⅰ区下面では周縁が削平され、とくに西側が段落することから、掘立柱建物跡を復原することは困難であった。しかし024では鍛冶が行なわれ、生産の場であった可能性もある。時期は不明であるが、段西側の段落ちや斜面の流失土中から製錬鉄滓が出土し鉄生産が近くで行なわれている。時期は包含層中から出土する古墳時代後期まで遡って可能性がある。

包含層は2層に分け出上器を検証したが、その時期差は不明確である。口ハゲ白磁が出てくる14世紀以後の遺物が多くみられる。上面の遺構002、010が近世以後のものであることを考慮すれば14～16世紀まで生活、生産の場として機能し、廃絶後墓地としての土地利用がなされたものと考えられる。この墓地としての利用はⅠ区の上段テラスにみられるように現在までひきつがれている。

Ⅱ区では丘陵斜面に古墳時代後期の集落があった可能性が大きい、削平そして、斜面流失により消滅している。その片鱗を示す遺物が自然流路に流れ込んでいる。その後、8世紀代の遺物や瓦片が周辺に出土し相応の施設が近くに存在していたことを示す。自然流路101(SD)にほぼ重なって中世の水路状溝の落ち込みを検出したが、中世では周辺が幾分安定した微高地であったことを示すものか。付近に柱穴が若干見られ集落が形成されていた可能性がある。

以上、概略時期とその変遷を記したが、最後に本遺跡の中世集落について展望をのべておきたい。堀ノ内の字名の位置についてはⅡで簡単に記したが、館を示すものでなく、開発拠点を示す事が従前の文献の方からも実証されている。それも「人道や河川など外界に通じる結節点にあたる部分に立地している」という。これは東国の在り方であるが、示唆される部分がある。周辺調査が進んでいないため明らかでないが、沖積地の開発が中世後半期にこの堀ノ内を中心に進められた可能性がある。そして、「鍛冶、鋳物師など技術者系在家が農具や田水開削の技術革新とかかわっていたという想定」は製錬、鍛冶鉄滓が出土する本調査では一つの可能性として念頭においておきたい。

註1 日本村儀史講座2 景観1「一、東国・九州の郷と村」海津一郎P-228



写真14 出土遺物1

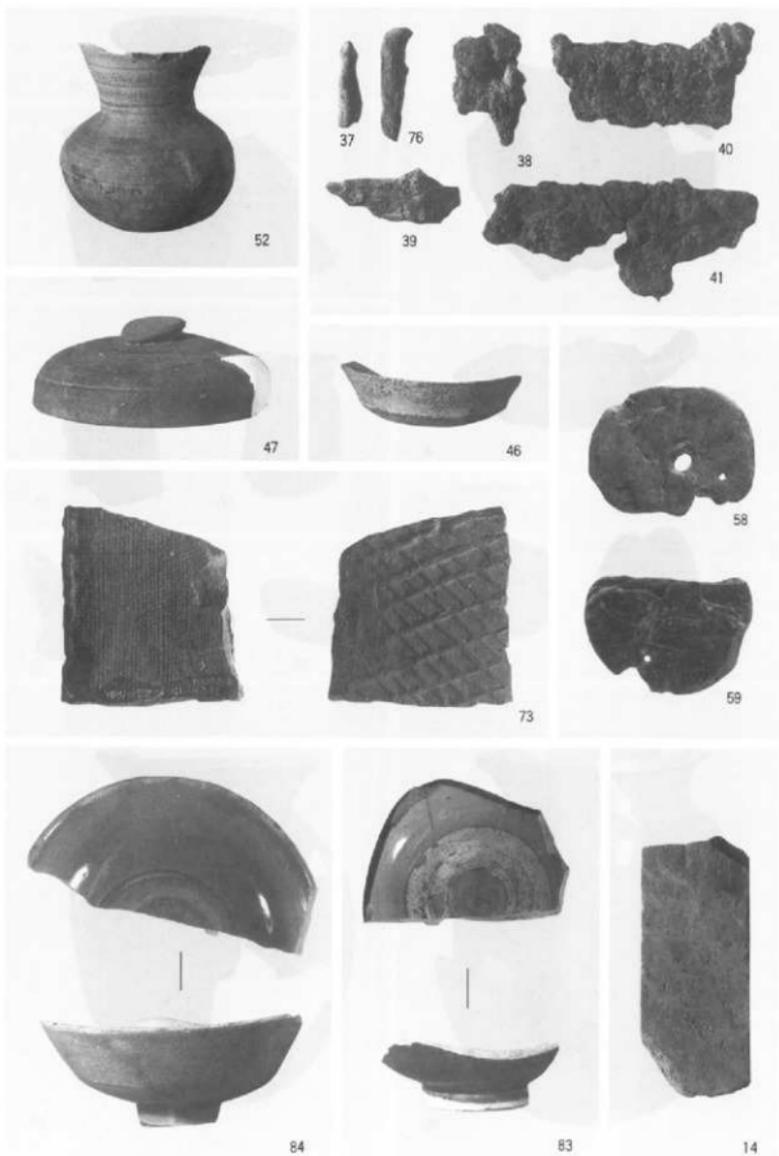


写真15 出土遺物 2

福岡市埋蔵文化財調査報告書第475集

堀ノ内遺跡 1

—堀ノ内遺跡群第1次調査報告—

1996年3月29日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 株式会社トータルプリンティング博多

福岡市南区大楠2丁目21番1号
